

南区地域子育て支援拠点事業 5か年のまとめ 実施概要

対象事業	南区地域子育て支援拠点事業
対象期間	令和4年度～令和8年度(5か年)
事業の実施者	特定非営利活動法人さくらザウルス
	南区こども家庭支援課
実施目的	1 今期5か年の事業を振り返り、成果や課題、今後の方向性などを整理します。 2 市民協働事業の実践を通じて経験を蓄積し、その後の市民協働や市民協働事業に活かしていくため、また、当該協働事業の当事者だけでなく、多くの市民等の協働への参加意欲を高めるため、当該評価を公開し、透明性を高めます。
実施時期	令和8年7月
実施について	拠点事業は、区と運営法人との協働により進めています。 毎年度、事業ごとに定めている「目指す拠点の姿」に沿って役割分担し、行動計画を立て、年度末には「振り返りの視点」に沿って取組の振り返りを行いながら事業を進めてきました。また、中間期には「有識者を交えた事業評価」を実施し、事業の運営・管理にフィードバックして拠点運営状況の向上を図っています。 今回は、中間期に行った「有識者を交えた事業評価」にその後の事業振り返りを加え、今期5か年のまとめとしました。 【参考】拠点の7事業 1 乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供(親子の居場所事業) 2 子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること(子育て相談事業) 3 子育てに関する情報の収集及び提供に関すること(情報収集・提供事業) 4 子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること(ネットワーク事業) 5 子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること(人材育成、活動支援事業) 6 地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること (横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業) 7 子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること(利用者支援事業)

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・子ども同士が育ちあう居場所として、まずは、子どもが遊び込めるような環境(ゾーンを区切ったおもちゃの配置)整備を行った。しかし、保育所や幼稚園入所の早期化などにより、拠点の利用者は低年齢化していることから、子ども同士の関係性作りに難しさがある。 ・拠点の利用が短期間化している。だからこそ、この時期に地域につなげることや、利用者同士を結び付けることがより重要になる中、スタッフの声掛けや関わり方について再認識する必要がある。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		B	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A
☆区内各地域の親子が集え、交流出来る場を提供できている。		A	A
評価の理由(法人)			
(主なデータ)			
【プログラム参加実績】			
「0歳児はじめましての会」参加者数: 令和4年度 118人、令和5年度 240人、令和6年度 290人、令和7年度 325人			
「双子・三つ子の会」参加組数: 令和5年度14組、令和6年度 15組、令和7年度 32組			
「プレママ会」参加者数: 令和5年度 69人、令和6年度 74人、令和7年度 102人			
【はぐはぐの樹利用者アンケート】			
「スタッフの対応や声掛けは適切で親しみやすく、気軽に子育ての相談ができますか。」:「はい」令和5年度 98%、令和6年度 98%、令和7年度 98%			
1【利用者を温かく迎え入れる雰囲気づくり】			
・「0歳児はじめましての会」を月2回定員を増やして実施した。初めて拠点に来るきっかけとなり、まだ場に慣れていない利用者の再利用にもつながった。			
・初来所の方には館内案内を丁寧に行い、横浜市地域子育て支援拠点サイト登録を一緒に行うなど、利用者がスムーズに利用できるようにした。			
・入退館時には笑顔で出迎えと見送りをするようスタッフ全員で心がけ、ベビーカー置き場での手伝いや、調乳時やお手洗いにいく際の子どもの見守りも進んで行い、保護者が過ごしやすいよう配慮した。			
・スタッフは利用者同士の会話が進むような声かけを行うとともに、利用者が自由に使える掲示板「はぐはぐの輪」を設けるなどして交流を促す機会を作った。			
2【幅広い利用者受け入れのための工夫】			
・「パパ限定! 日曜はぐはぐ」「シングルママの会」「外国人ママ・パパのための…」等のプログラムを開催することで、多様なバックグラウンドを持つ利用者となつながられるようにした。「シングルママの会」については回数を増やすなど力を入れて取り組み、間口を広げた。ただ、「外国人ママ・パパのための…」は参加者数が少なく、テーマ設定、周知の難しさを感じている。			
・妊娠期の方が来所した際は、赤ちゃんひろばの利用者につないで話す機会を作ったり、地域情報を提供した。また、プレママシートに記入していただくことで絵本の貸し出しも行い、再利用につながった。			
・「双子・三つ子の会」は土曜午前に6回行い、多胎児親子が出かけるきっかけを作った。令和7年度後半からはリピート利用も増え、1回の参加者数が30人を超えることもあった。			
3【ニーズ把握とその対応】			
・年に2回実施している「はぐミーティング」(注1)で、利用者の率直な意見、要望を聞き取った。もっと身体を動かしたいというリクエストに応え、全身を使って遊ぶ玩具を購入したり、授乳スペースの混雑を解消できるようにパーテーションを導入したりした。			
・平日に来所できない方に向け、令和8年度には初めて日曜開館を行った。			
・プレママ会のキャンセル待ちが多かった月には一日に2回開催し、さらに個別沐浴の機会も設け、ニーズに応えた。			
・利用者の声に応え、「みんなの保活」「病院・クリニック」のクチコミファイルを作成し、好評を得た。保育園のクチコミが目当てで来所する利用者も少なくない。			

4【親と子が育つ場】

・ままごと、大型ブロック等ゾーンを区切って子どもが遊び込めるようにした。また、その日の混雑具合によって遊具の場所や種類を適宜変更し、異年齢の子どもたちが安全に遊べるように配慮した。
 ・子どもが自分の思い通りにならず癇癪やパニックを起こした際には、落ち着けるスペースを作ったり、子どもの気持ちの切り替えを手伝ったりし、保護者がいづらい雰囲気にならないようにスタッフが柔軟に対応をした。
 ・コロナ収束後、赤ちゃんひろばでは、個別のマットから床全面にマットを敷き詰める仕様に変更し、利用者親子の距離が近くなった。ランチタイムのテーブルもグループ利用を解禁し、保護者同士で会話が弾む様子も見られた。

5【拠点外の交流の場の充実】

・区内5か所で「おでかけ広場」を毎月各2回程度実施し、拠点から遠い場所でも親子の交流の場を提供した。令和7年7月からは永田地区センターと中村地区センターで午前と午後計5時間の「出張ひろば」をスタートした。
 ・各おでかけ広場では会場周辺の地域情報を提供し、歯科衛生士や子育てパートナーの巡回も行った。
 ・ぐみょうじプレイパークと共催で「おさんぽはぐはぐプレイパークDEあそぼう」を実施し、雨天で中止となる回もあったが、参加者には毎回好評だった。

注1:「はぐミーティング」 拠点利用者から参加者を募り、はぐはぐの樹の運営について意見や提案を自由に話し合うプログラム

評価の理由(区)

①【利用者の参加動機を促す工夫と対応】

・区の事業や訪問を通じて養育者の声を拠点にフィードバックし、温かい雰囲気やスタッフの声掛けが継続されているか、継続利用につながっているか等を定例会を通じて確認した。
 ・「0歳時はじめての会」を区の事業を通じ、養育者が拠点を訪れる第1歩につながるよう周知した。
 ・利用者同士の交流のきっかけになるよう、おはなし会や名前シールの活用などの工夫した取組が効果的になっていることを定例会等を通じて確認した。

②③【多様な養育者への働きかけと工夫】【ニーズ把握とその対応】

・母子手帳交付や両親教室などで把握した妊娠期のニーズを拠点と共有した。「プレママ会」の参加を対象者に積極的に周知したことで、参加者の増加につながり、妊娠期からの地域参加を促進することができた。
 ・「双子・三つ子」「外国人ママ・パパ」「シングルママ」などの交流会について母子訪問や乳幼児健診等の事業を通じて対象者に紹介した。拠点とつながりにくい対象者にも必要時、拠点に同行し継続的に利用できるよう支援した。
 ・R8年度から日曜開館を実施し、さらに多様な対象を受け入れる間口を拡大した。
 ・区内5か所で「おでかけ広場」を毎月各2回程度実施し、拠点から遠い場所にお住いの親子でも気軽に参加できる交流の場となっている。令和7年7月からは永田地区センターと中村地区センターで午前と午後計5時間の「出張ひろば」を実施し、拠点から遠い地区の保護者に対して積極的に参加を促した。また参加のきっかけづくりとして、歯科衛生士による出前講座の開催を他課と連携し実施した。南区は3歳児の齲歯罹患率が高い傾向があるため、拠点と連携したむし歯予防の効果的な取組となっている。また、企画を午後開催としたことは、保育所等に所属する児の就学までの支援につながっている。
 ・「外国人パパママのための・・・」をみなみラウンジと共催で実施することについて、3か国語のチラシを作成し、事業を通じて配布する等、必要な対象者に届くよう周知に努めた。外国人当事者と関係者の参加があった。当日は拠点担当保健師が参加し、参加者のニーズに合わせ相談継続につなげた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・妊娠期や低月齢向けプログラムの回数増、ニーズが高い情報の提供を充実させることで、拠点に来館するきっかけを増やし、スムーズな拠点利用につなげることができた。
 ・父親が参加しやすいプログラムになるよう試行錯誤を重ねた結果、参加者数が増加するに留まらず、普段の拠点利用も定着した。

(課題)

・外国籍保護者への拠点周知の必要性はもちろんのこと、すでに拠点とつながっている外国籍利用者についても潜在的なニーズをキャッチして課題解決に導けるよう、広く関係機関と連携・協力できる体制づくり、言葉の壁を越えた情報発信の在り方を検討していきたい。

様式1ー1 地域子育て支援拠点事業評価シート

振り返りの視点

ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。

イ 居場所を訪れる様々な利用者（養育者、子ども、ボランティア等）の間に、交流が生まれるように工夫しているか。

ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。

エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。

オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。

カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。

キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。

ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・スタッフの相談スキル向上については、子育て世代の抱える課題の把握、相談後のスタッフ振り返り、研修(内部、外部)等の機会で行っていく必要がある。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A
評価の理由(法人)			
(主なデータ)			
【令和7年度はぐはぐの樹利用者アンケート】			
「スタッフの対応や声掛けは適切で親しみやすく、気軽に子育ての相談ができますか。」:「はい」98%			
自由記載(抜粋):「スタッフの方との何気ないおしゃべりがリフレッシュになります。」「はぐはぐの存在とスタッフさんの暖かさに助けられています。」「いつも声をかけていただけて、些細な悩みもすぐに相談ができて助かっています。」			
【相談プログラム参加者感想】			
「子どもの年頃の近い親御さんとお話できて、とても参考になりました。」「具体的な工夫や実際の経験を知ることができました。まだ不安はありますが、少しずつ自分の中でも整理していきたいと思います。」「今後の見通しができたのすごく良かったです。」「子供の成長はそれぞれですので、他の子と比べないのが大事だと思います。」「個別にお話しできて、こちらの状況も詳細に伝えながら相談できたので、このやり方でやってみよう」と具体的にイメージができてよかったです。」「不安な気持ちを聞いて貰えて良かった。」			
1【子育ての不安や悩みを安心して話せる関係づくり】			
・利用者が居場所で過ごす様子に応じて、さりげなく声をかける等、日常の会話を大切に、まずは話しやすい雰囲気づくりを丁寧におこなった。その上で相談等を通して把握した困りごとや心配な状況については、毎日行われているスタッフ間の振り返りの中で共有し、継続的な見守りや声かけを行った。			
・相談を主目的としないプログラムにおいても、支援が必要と思われる様子が見られたときはスタッフから相談担当につなぎ、必要に応じて関係機関への紹介や情報提供を行い、切れ目のない支援に努めた。			
2【ハードルの低い専門相談の実施】			
・「子どもの発達・療育」「ダウン症児そだて」(注1)「保育士さんに聞いてみよう」(注2)「保育・教育コンシェルジュ相談」(注3)等、継続して実施している相談プログラムは、より参加しやすくなるようタイトルや申込方法を工夫した。また「こどもの歯の個別相談」「管理栄養士の離乳食相談」(注3)「看護師さんから学ぶ子どものホームケア」(注4)「療育センターの相談員さんが来所します」「マザーズハローワークの相談員さんが来所します」(注5)を新たに定期的に実施し、身近な場所で専門相談ができる機会を拡充した。			
・相談プログラムは定員に達する回も多く、養育者のニーズの高さがうかがえた。参加回数に制限は設けず、継続して相談できる機会を確保した。			
注1:「子どもの発達と療育」「ダウン症児そだての会」先輩保護者かつアドバイザーとして「障がい児者の将来を考える会泉の会」の方が同席した保護者同士の交流及び相談を目的としたプログラム。			
注2:「保育士さんに聞いてみよう」保育士による子どもの発達や生活習慣等に関するレクチャーとグループ相談のプログラム			
注3:「保育・教育コンシェルジュ相談」「子どもの歯の個別相談」「管理栄養士の離乳食相談」各専門職による個別相談			
注4:「看護師さんから学ぶ子どものホームケア」看護師による子どもの健康管理やホームケア、事故予防に関する講義とグループ相談のプログラム			
注5:「療育センターの相談員さんが来所します」「マザーズハローワークの相談員さんが来所します」それぞれ、横浜市中部地域療育センター、マザーズハローワーク横浜の相談員が来所し、交流スペース内を巡回しながら相談や質問に対応するプログラム			

評価の理由(区)
①【身近な場所として気軽に安心して相談ができる場づくり】 【つながる・支える・広がるプログラムの設定】 ・令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)の結果では、はぐはぐの樹を利用している人は困りごとの相談先として親族や友人に次いで「はぐはぐの樹スタッフ」と回答している率が高い。相談先としての認識が広がっていると考えられる。 ・月1回の広場での「子育て相談どーなつ」の開催は、より身近な相談の場として機能していることや、相談内容について定例会で確認した。 ・年代や区の特徴に配慮した多様な養育者と子どもを受け入れられるよう、相談しやすい場になっているかを定例会、区の事業等で確認をした。 ②【様々な連携の強化】 ・定例会で、養育者からの相談内容を共有した。必要に応じて、対応についての助言を行い、支援方針を共に検討した。対象者のニーズにあった支援につながるよう後方支援を行った。 ・専門職と発達について相談対応ができるような日を作るため、療育センターと連携し「こどもの発達と療育」のプログラムをR7後半から開始した。子育てパートナーの個別相談からもプログラムにつながる仕組みができているかを確認し助言した。 「療育センターの相談員さんが来所します」では、中部地域療育センター相談ルームいろはの相談員が施設内巡回で相談を受ける日もあり、身近なところで発達の相談ができる割合が上がっていることを確認した。 ・シングルマザーが拠点とのつながりができるよう同行訪問等で支援した。妊婦には赤ちゃん用品を譲り受ける等をきっかけとして拠点とのつながりを作った。乳幼児の養育者にはシングルママの会等を積極的に周知した。
拠点事業としての成果と課題
(成果) ・様々な専門相談を継続実施し、養育者が必要に応じて専門職への相談を選択できるようにした。 ・毎日の振り返りやスタッフ会、区との会議を通して継続的な見守りやフォロー体制を維持することができた。 (課題) ・多様な背景を持つ養育者への支援に対応するため、スタッフの相談スキルのブラッシュアップを図るとともに関係機関との連携をさらに深めていく必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・拠点を通じて子育て情報を発信したい人への支援。拠点のInstagramや「南区子育てカレンダー」を活用し、地域の子育て情報が地域に届きやすい環境整備を継続していくとともに、南区の子育て情報が集約し定着するようなより使いやすいツールを引き続き検討していく。 ・拠点の情報集約・提供の機能を、区役所内や関係機関に発信する。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B
評価の理由(法人)			
(主なデータ)			
【はぐはぐの樹利用者アンケート】 「情報コーナーは子育てに関する情報が分かりやすく提示されていますか」:「はい」 令和6年度 92.5%、令和7年度 95% 「はぐはぐの樹を利用することで子育てについての知識や情報が増えましたか」:「はい」 令和6年度81.5%、令和7年度 84%			
【南区子育てカレンダー参加施設(団体)数】 令和4年度 60施設、令和5年度 76施設、令和6年度 79施設、令和7年度 85施設			
【はぐはぐの樹Instagramフォロアー数】 令和4年3月616人、令和5年3月958人、令和6年3月1265人、令和7年3月1620人、令和8年6月1989人			
【保育園・幼稚園口コミ情報ファイル 情報シート合計枚数】 令和4年度70枚、令和5年度91枚、令和6年度139枚、令和7年度183枚			
1【情報の内容に応じた提供方法の工夫】			
・はぐはぐの樹だよりを毎月約2500部発行し、区の事業や区内の公共施設、子育てサロン各駅のPR BOXで配布している。拠点に来所が難しい利用者向け「おでかけ広場」各5会場にも情報コーナーを設置し、会場のあるエリアの情報を掲示した。 ・情報コーナーはカテゴリー別(遊び・仕事・預ける・相談・その他)に分け、それぞれに見出しを付けた。他区拠点・親子の居場所の情報などは最新号を配架するなど、手に取りやすくした。 ・「南区幼稚園・認定こども園一覧」を南区幼稚園協会の協力のもと作成し、拠点及び親と子のつどいの広場、子育てサロンなどで配布した。 ・南区内の子育てサークル情報を拠点ホームページのサイドメニューに新たに作成。サークル入会希望者がアクセスしやすくなった。			
2【情報の集約・提供の拠点であることの周知】			
・「南区子育てもっとネット」会議(注1)でPRするとともに、拠点スタッフや横浜子育てパートナーが地域に出向いた際にはチラシなどの提供を依頼し、拠点をハブとして各所に周知を広げられることを伝えた。 ・井土ヶ谷保育園の育児支援専任保育士の紹介により、「南区子育てもっとネット」に参加していない保育園にも「南区子育てカレンダー」(注2)入力マニュアルを送付し、多数の入力を得てカレンダーの内容の充実につなげることができた。 ・利用者のアイデアでスタートした「保育園・幼稚園口コミ情報ファイル」は年々シート数が増加するなど好評を得た。シートを参考に園選びをした利用者が、入園後にはシートを記入する側になって、情報交換を通じた利用者同士のゆるやかな支え合いの場になった。			
3【SNSを活用したタイムリーな情報発信】			
・Instagramのフォロアー数も徐々に増え認知度も広がっている中で、子育てサークル・地区センター・保育園などのアカウントを持たない団体に、拠点のInstagramで情報発信できることを伝え代行投稿を行った。その結果、申込制のプログラムなど短時間で予約が埋まったとの声もあった。 ・はぐはぐの樹だよりを投稿するにあたり、投稿した内容をストーリーズやハイライトといった機能にて、長く利用者の目に触れる様、工夫した。			
注1:「南区子育てもっとネット」安心して子育てできる南区を創るため、地域の子育て力を高めることの目的としたネットワーク。南区で乳幼児親子への支援事業を行っている施設・団体・関係機関が参加している。平成21年度発足。 注2:「南区子育てカレンダー」はぐはぐの樹ホームページ内にあり、南区の子育て関連の催しを掲載するカレンダー。各団体がログインして入力できるようになっている。			

評価の理由(区)
①【情報収集・提供の工夫】 ・区役所健診フロアに拠点の情報コーナーを設置し、健診会場に紹介用DVDを放映する等周知機会を拡大した。また、「こんにちは赤ちゃん訪問」(注1)「赤ちゃん学級」「ハローベビークラス」などの事業を通じて拠点情報の周知を徹底した。R4から幼稚園・認定こども園一覧を拠点内に掲示。 ・令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)より、子育て支援関係者の情報収集・提供機能の認知度は9割を超えている。そのうち6割近くは子育て世代に紹介したことがある、または自身も関わっていると回答した。担い手の認知度や拠点にアクセスできない人にどう届けるか、周知していく当事者としての役割意識が半数以上にみられた。 ・「南区子育てカレンダー」について育児支援専任保育士と協力し未入力の参加団体を拡大し、情報拡充を図った。ネットワーク会議を通して拠点がカレンダーへの入力サポートができることを周知している。 ・区内の子育て支援関係者が集まる「もっとネット会議」やこんにちは赤ちゃん訪問員(注1)の定例会の場を利用し、区民と接する機会が多い担い手へ、拠点の幅広い情報集約・提供機能を周知した。 ・周知方法はイベントのホームページ、Instagram、パマトコの利用で参加者対象に合わせた複数の方法を検討し周知を拡大した。情報発信受信が多様化する中で、定例会等で周知方法はターゲットとしたい層にどう届けるかを常に検討していく必要がある。 ②【情報の集約・提供の拠点であることの周知】 ・拠点の情報収集・提供機能について、子育てサロン従事者やこんにちは赤ちゃん訪問員等の子育て支援関係者に周知。サロンにInstagramでの情報発信を拠点が支援できることを周知。年度はじめにはサロンの実績とチラシの情報を地区担当保健師が収集した。サロンの情報を拠点と共有し、広く養育者に届くよう周知に努めた。情報コーナーは「遊び」「預ける」「相談」「仕事・講座」等のカテゴリーに分け、見つけやすいように個々のフォルダーにカテゴリー別の表示を付けて配架した。また、他区拠点や他区の子育てサロンなどのチラシを配架し、近隣区の情報も手に取りやすく改善されていることを確認した。
拠点事業としての成果と課題
(成果) ・Instagram登録者数の増加と比例し、はぐはぐの樹のプログラムや依頼を受け投稿したイベント情報などを、乳幼児親子のもとに広く届けられていると感じる。また「南区子育てカレンダー」の参加団体が増えたため、年間を通し、充実した地域情報を提供することができた。 (課題) ・拠点サイト(パマトコ)の導入により、拠点利用者向けには多様な情報発信が可能になった。しかし、支援の担い手になる層へのアピール力が不足している。積極的に担い手の募集に務め、拠点を通じ、正しい情報を精査し発信していくと共に、新たな周知先の開拓も模索していきたい。
振り返りの視点
ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。 イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。 ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。 エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。 オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。 カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。 キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)		
		法人	区	
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・身近なエリアでの具体的な取り組みを、南区内のすべてのエリアで進めていきたいが、エリアによって働きかけが難しいところもある。エリア内の子育てに関わる人とのつながり方や、継続的な取り組みを後押しできるネットワークの推進をどのようにしていけばよいのかを検討していく。	A	A	
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	A	
評価の理由(法人)				
(主なデータ) 【令和7年度第2回南区子育てもっとネット全体会議参加者アンケート】 「本日のもっとネット会議はいかがでしたか」:「とても良い」74%、「良い」17%(回答率52.3%) 感想コメント(抜粋):「座学で学んだことを実践ワークの場で考え、皆でシェアできたのがよかった。行政や拠点、このもっとネット会議を含めた一貫とした取組も知ることができた。南区の特徴を活かしたテーマの今年度のもっとネット会議は新鮮でした。」 【事業実績】 「まちのほっとスペーススタンプラリー」スタンプポイント(参加支援場所)数 令和4年度 86か所、令和7年度 95か所 まちのほっとスペーススタンプラリー景品交換数 令和4年度 242個、令和7年度 425個 【令和7年度「まちのほっとスペーススタンプラリー」参加者・支援場所アンケート】 「スタンプラリーを通して参加者が増えましたか」:「増えた」26%、「少し増えた」40%(回答率49.4%) 参加者コメント:「スタンプラリーのおかげで、気になっていた支援施設に行くことができました」「今回初めて参加しました。とても楽しかったですし、これをきっかけに(作業所の)パン屋さん利用したいと思います」 支援場所コメント:「まだ行ったことのない居場所へ行くきっかけになる、作業所というものを知り場所を知れた、など参加者さんとお話が盛り上がった」「初めてお越しいただく親子様が増えました。ケアプラザを知って頂くきっかけとなりお礼申し上げます」 【はぐはぐの樹利用者アンケート】 「はぐはぐの樹を利用することであなたの子育てに変化はありましたか?」:「地域の人と知り合う機会が増え、地域を身近に感じられるようになった」令和4年度57%、令和7年度 64%				
1【エリアの特性や区の課題に応じたネットワーク】 ・南区子育てもっとネット(注1)会議では身近なエリアでの連携を深めるため、エリアごとの開催カレンダーや支援情報マップづくりなどのグループワークを取り入れた。また、南区で外国人子育て家庭が増加していることから、当事者の困り事を理解し、支援場所での受け入れ体制づくりの一環として「やさしい日本語」を学ぶ機会を持つなど、ネットワーク全体で課題に取り組むことができた。 ・南区内5か所の親と子のつどいの広場とのネットワーク「みなともネットワーク」を新たに発足させ、オレンジリボン児童虐待防止パネル展に協力して取り組むとともに、スタッフ合同研修会やメーリングリストを活用したイベント等の相互周知協力等で、拠点と広場、広場同士の日常的な連携を進めることができた。 ・南区子どもの居場所づくりネットワーク(注2)に企画委員として参加し、新たに立ち上げる団体に情報提供や開催周知協力するなど、活動の拡大に尽力した。また必要に応じて、拠点利用者を丁寧につないだ。				
2【利用者親子と地域をつなぐ工夫】 ・「まちのほっとスペーススタンプラリー(注3)」は参加者が大幅に増加し、コロナ禍以降、参加者が戻っていなかった地域サロンへの後押しとなった。また、スタンプポイントになり得るところに積極的に声をかけて子育て分野以外からの参画も得ることができた。 ・拠点所在地の地区社会福祉協議会が実施するイベントに協力・参加することで、子育て世代が地域行事に参加するきっかけになった。				
注1:「南区子育てもっとネット」安心して子育てできる南区を創るため、地域の子育て力を高めることを目的としたネットワーク。南区で乳幼児親子への支援事業を行っている施設・団体・関係機関が参加している。平成21年度発足。 注2:「南区子どもの居場所づくりネットワーク」南区内の施設等と社会福祉協議会、区役所が連携して、平成28年度から、子どもの居場所の活動や子どもの居場所を作りたい人を応援しているネットワーク。 注3:「まちのほっとスペーススタンプラリー」南区子育てもっとネット参加施設・団体が開催している支援会場や地域イベントへの乳幼児親子及び妊婦の参加促進を目的とした催し。規定枚数を集めると、地域作業所等のショップで小物やお菓子等と交換できる。				

評価の理由(区)
①【活動を支え合い・高め合うネットワーク作り】 ・「南区子育てもっとネット会議」では南区母子保健、地域活動の課題等を共有し、活動の存続や活性化、地域のつながりづくりに視点を置いたテーマを設定し、拠点、区が協働で実施。R7年度は「外国人子育て家庭への支援」をテーマに講義やグループワークを行い、支援場所での受入れ方・関わり方について保育園・幼稚園・各サロンが理解を深める機会となった。多様な対象者を地域で支える土壌づくりの1歩になった。 ・「みなともネットワーク」は虐待予防啓発事業オレンジリボンキャンペーンを機に発足した。毎年の区のこどもの権利擁護担当のキャンペーン(ギャラリー展示)に継続的に協力しネットワークの充実が図られている。R7年度はお互いの事業の相互理解のための交流研修会も企画され、さらにネットワーク強化、支援の資質向上につながっている。業務担当保健師は、みなともネットワーク会議に参加しそれぞれの活動の進捗状況とネットワークの強化を確認した。 R7年度のみなみで子育てプレデビュー事業の開始にあたり、「みなともネットワーク」と連携して実施した。拠点の後方支援を受けながら円滑にスタートしR8年度も拡大実施することができた。 ・区内には中学生までを対象とした居場所活動が約30か所あり、その活動を支援する「子どもの居場所づくりネットワーク」を実施している。拠点もネットワークに参画し地域状況を把握すると共に居心地の良い居場所づくり等についてアドバイスし、団体活動の質の向上に貢献していることを確認した。 ・「令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)」結果では、連携先として区役所、南区社会福祉協議会、地域ケアプラザが上位に位置している。地域活動を活性化するため各機関の強みを生かしつつ連携した支援が必要なことを拠点と共有している。 ②【再開した地域の支援場所へのつながり直し】 ・「まちのほっとスペーススタンプラリー」は妊娠期から乳幼児、その養育者が地域とつながる機会となるよう、区の事業で周知をした。スタンプラリーを通し、参加者の増加につながっていることが団体の活動や、地域の活性化につながっていることを共有。 ・個別支援では親子のニーズにあった身近な地域の子育て支援活動につながるよう、情報提供だけでなく同行訪問をするなど丁寧な支援を行う中で活動の課題把握に努めた。
拠点事業としての成果と課題
(成果) ・地域の支援場所の中で、コロナ禍を境に低下した参加者数がなかなか回復しないなどの課題を抱えているところに対し、子育て家庭を取り巻く状況とその変化を伝え、開催の意義を再確認するとともに、関係機関同士の連携の重要性や新たに顕在化してきた課題を共有して、活動の活性化を後押しした。 ・みなともネットワークでは一つの事業と一緒に取り組むことによって連帯感が深まり、取り組み内容や進め方を工夫して、代表者だけでなく各施設のスタッフ同士が交流し学び合う機会になった。 (課題) ・「南区子育てもっとネット」に参加する関係機関同士の相互理解や顔の見える関係は築けているものの、さらに一歩進んだ連携・協力した取り組みの実施をどのように実現していけば良いか。あらためて「子育て支援で何を目指すのか」を示し、共通理解をもって参集して意見交換が深められるようにする必要がある。
振り返りの視点
ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。 イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。 ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。 エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・地域の子育てサロン等に対して、担い手となるボランティアを発掘・育成する、広報周知の方法について学ぶ機会を設けるなどのサポートを、さらに多くの地域ケアプラザや区社会福祉協議会と連携して行っていけると良い。	B	B
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	B
評価の理由(法人)			
(主なデータ) 【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)】 「拠点の各機能の認知度「人材育成」について」:「知っている」80.0% 「はぐはぐの樹」に期待すること・メッセージ(自由記載):「地域の学校との交流会は次世代との相互理解が深まり素敵な企画と思う」 【令和5年度支援者向け講座(離婚・再婚後の子育てをどう支える?～ステップファミリーが幸せに生きるには～)参加者アンケート】 「本日の内容はいかがでしたか?」:「とても満足」86.5%、「満足」10.5% (回答率95%) 「コメント(自由記載)」:「具体的なケースをもとにワークもあったので、他の皆さんの意見が聞けてとても良い時間でした。」「ケースを考える時に自分はずいぶん親目線で物を考えてしまう傾向があることに気づきました。子の視点を大切にしたいです。」 【令和6年度区民向け子育て講演会(自分らしくカラフルに生きる～筋ジストロフィーと子育てと家族～)参加者アンケート】 「本日の内容はいかがでしたか?」:「とても満足」76.9%「満足」15.4% (回答率68%) 「コメント(自由記載)」:「温かい心を持ち、困難に立ち向かっている人の一助となれる人の輪が大きくなることを願います。とても素敵な講演でした。」 【令和7年度はぐはぐの樹利用者アンケート】 「はぐはぐの樹を利用することであなたの子育てに変化はありましたか?」:子育て中だからできることをやってみよう、やってみようと思うか「はい」82.5% 【事業実績】 看護実習・インターンシップ・ボランティアの大学生受入のべ人数:令和4年度55人、令和7年度99人			
1【南区の課題、支援者のニーズを酌んだ講座・研修】 ・支援者向けの講座は、「ジェンダー」「傾聴」「障がい理解」「ステップファミリー」「外国人支援」等、ネットワークを通じて把握した支援関係者のニーズからテーマを選んで企画し好評だった。 ・子育て支援関係者向けの広報紙「にこで」には講座やネットワーク会議の報告、様々な地域の支援場所の紹介、感染症対策・おもちゃのメンテナンス・緊急時対応等に関する記事を掲載し、担い手一人一人に情報を届け、活動に活かしてもらうことを意識して発行した。 ・南区内の5か所の親と子のつどいの広場と協力し、常設の広場のスタッフに必要な知識を習得する合同研修を実施した。また、施設見学と交流会、情報交換会、スタッフ交換研修と様々な形式で、より多くのスタッフにスキルアップの機会を作った。			
2【拠点外にも広がった利用者の力】 ・絵本好きの利用者がプログラム参加をきっかけに結成した「絵本サポーター」は、オスズの絵本を紹介する情報紙「えほんのはなし」の発行、南図書館と連携した「子どもお気に入り絵本展」などの活動を行った。			
3【区民向け講演会の再開】 ・多くの区民が参加する地域行事「南なんデー」「みなみ桜まつり」「永田地区センター祭り」に出展参加し拠点事業をアピールした。 ・コロナ禍により見合わせていた区民向け講演会を令和7年度に再開することができ、参加者数は伸び悩んだものの満足度が高い内容になった。			

4【中高大学生との交流の拡大】

・家庭科の授業の一環で開催している学生と乳幼児親子の交流会は、長年にわたり定着している横浜国大附属横浜中学校の他、新たに横浜商業高校でもスタートした。横浜商業高校はクラス数が多いため、中区・西区の拠点にも協力を仰いで開催し好評だった。

・近隣の横浜総合高校のキャリア教育の一環で、拠点が提示した地域課題について高校生が解決策を提案するという取り組みに協力した。オファーしたり、インタビューに答えたりする中で、子育てや子育て支援について周知することが出来た。

・大学・専門学校（主に看護学生）の実習の依頼が増え、できる限り受け入れた。利用者に妊娠・出産の体験談を語ったり、質問に答えたり、積極的に関わってもらえるよう声かけすることで、自らの経験を伝えることの価値を感じてもらった機会を作った。

評価の理由(区)

①【支援者のニーズに合った講座・研修】

・支援者向け講座等は、内容に合わせて対象者に周知し、参加に結びつけることができた。

②【当事者が力を発揮できる支援】

現存する子育てサークル・子育てサロン等に訪問し、活動状況等の相談に応じた。その中で拠点につながるメリットを伝えた。併せて、子育て支援者事業による活動支援も継続して行った。

③【区民向け啓発の再考】

・南区には子どもの居場所活動や外国につながる子どもの支援を行う団体も多くあるため、様々な活動や支援者となつたことで子育て家庭への理解を深め、重層的な子育て支援の仕組み考えるとともに啓発を再考している。

④【中高大学生との交流の拡大】

大学生が子育てについて考え・学ぶ機会を希望する場合には、継続して機会が得られるよう拠点につないだ。拠点が中学校・高校と協力し、学生と乳幼児親子のふれあい交流を実施。学生が妊娠・出産・子育てへの理解を深める貴重な機会になっていることの意義を定例等で確認し、後方支援をした。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・子育てに関する様々な課題に向き合うテーマ選び、講義だけでなく参加者同士が学び合えることにも留意して企画したことで、充実したスキルアップの機会を提供することが出来た。

・中・高生と乳幼児親子との交流の機会や大学等の実習受け入れは、各校に積極的にアプローチした上で丁寧な打合せを行うことで質・量ともに向上させることが出来た。

(課題)

・拠点を利用する期間が短期化する中で、当事者が力を発揮できる様な動機づけや機会づくりをどのように進めていけばよいか。様々な関わり方を模索していきたい。

・今後、地域で支援にかかわる人材の掘り起こしでは、広く区民を対象とし、地域ケアプラザや南区社会福祉協議会等と連携した取組を進めていく必要がある。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭（妊娠期の方を含む）を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・区境など提供・両方会員の少ない地域への会員増の働きかけ方の検討、新たな周知先の発掘が必要である。	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A
評価の理由(法人)			
(主なデータ)			
【会員数】		【コーディネート数】	
【新規入会者数】			
【令和7年度 はぐはぐの樹利用者アンケート】 「子育てサポートシステムを知っている」:83% 【令和7年度 おでかけ広場利用者アンケート】 「子育てサポートシステムを知っている」:81.6%			

1【広く区民が参画するための取り組み】

- ・入会説明会は、拠点での開催の他、南区内の親と子のつどいの広場での定期開催、令和7年度からはおでかけ広場の永田地区センター会場と中村地区センター会場でも出張開催し、希望者が足を運びやすい場所で入会説明会に参加できるようにした。
- ・年間の入会説明会スケジュールを掲載した通常の周知チラシに加え、小学校入学、幼稚園・保育園入園時期、それぞれ対象者を絞ったチラシを作成、配布した。
- ・提供・両方会員募集については、チラシを弘明寺商店街掲示板への掲示、広報よこはま南区版で自区開催研修会を告知するなど様々な方法を駆使した。さらに、提供・両方会員希望者には随時入会説明を行い、e-ラーニング等がスムーズに受講できるよう、受講申込までを一緒に行うなどのサポートを行った。
- ・区支部発行のニュースに「提供会員募集」を定期的に載せることで、利用会員が両方会員に興味を持ったり、また預かりを行った提供会員からの紹介で、予定者研修の受講につながった。

2【様々なニーズへのアプローチ】

- ・緊急を要するケース、また様々な事情で入会説明会に足を運ぶことが難しい養育者については、個別に家庭を訪問して入会説明を行った。さらに必要に応じて、区こども家庭支援課保健師やこども家庭支援員と共に訪問し、援助活動につなげた。
- ・食支援団体と連携したフードパントリーイベント(注1)や、「シングルママの会」開催時、ひとり親家庭の希望者に入会説明を行い、利用に結び付けることができた。
- ・区や赤ちゃん訪問員を通じて、「子サポdeあずかりおためし券」が広く周知されるようになった。入会説明会では、対象者の参加が多数を占めるようになり、券を使用した利用につながっている。

3【丁寧なコーディネートと会員フォロー】

- ・新規事業(提供・両方会員への給付金)や横浜市地域子育て支援拠点サイトへの移行といった、大きな仕組み変更の際、集団説明会を開催したり、個別の説明を行ったりと、提供・両方会員への丁寧なフォローを行った。その結果、令和7年度後半からは、ほぼ全提供・両方会員が拠点サイトを使用した活動報告ができるようになり、活動がスムーズになった。
- ・援助の依頼については、拠点システムを活用してコーディネーター間の情報共有を行い、利用会員・提供会員双方に最善の提案ができるよう心がけた。
- ・活動報告書のシステム化により、提供会員の活動の様子や困りごとを聞く機会がなくなった為、援助依頼時や事前打合せの時に聞き取りをし、気になるケースについては、電話を入れるなど、丁寧にフォローを行った。
- ・提供・両方会員の新規登録時には、保育グループ「ぐるんぱ」(注2)を紹介、会員になった後の仲間づくりや、活動機会の増加につなげて、モチベーションアップができるよう努めた。

4【他の機能、機関と連携した支援】

- ・援助活動の様子の確認等から、専門的な支援が必要と判断した場合は、施設長と協議の上、区にスムーズにつなぐことができた。
- ・援助依頼の内容に応じて、他の支援(保育・教育コンシェルジュ、一時保育・預かり、産前産後ヘルパー派遣事業等)の情報提供を行うとともに、子育てパートナーの紹介を行った。また、依頼の段階で連携する必要が想定されるケースについては、施設長や横浜子育てパートナーと相談しながら丁寧にコーディネートを進め、必要に応じて区につないだ。
- ・区役所で行う乳幼児健康診査、親子あんしん窓口事業、南区内6箇所の赤ちゃん学級、里親関連団体主催の研修、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジからの依頼で日本語教室時の保育等、「ぐるんぱ」が多面で広く援助活動を行った。

注1:「フードパントリーイベント」 フードバンクNPOと共催で主にひとり親家庭を対象に食品や日用品・衣類等を提供している。拠点事業外の自主事業として月1回開催。

注2:「ぐるんぱ」 南区の横浜子育てサポートシステム提供・両方会員による一時保育を行うグループ。拠点が実施する講座などの保育を中心に子育て支援関連事業での保育依頼を受けて活動中。令和8年5月31日現在メンバー17名。

評価の理由(区)
①【広く区民が参画するための工夫】 小学校と連携し新入生学校説明会でもチラシを配布した結果、新たな会員登録につながった。 ・「令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)」結果で、「居住年数の1年未満」の認知度が低いことが判明したため更なる周知方法の工夫が必要である。 ・「令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)」結果で、「知らない」と回答した者は保育園関係者や主任児童委員の割合が高かった。養育者からの相談を受ける立場にあるため認知度を上げる取組が必要である。 ②【様々なニーズへのアプローチ】 ・「子サポdeあずかりおためし券」ができ、母子手帳交付時等に丁寧な説明をした結果、利用会員の登録につながった。また、個別支援では情報提供をするだけでなくコーディネーターと連携し迅速な利用につながることができた。 ③【丁寧なコーディネートと会員フォロー】 ・利用会員からは提供会員への信頼や感謝の声が聞こえる半面、養育支援家庭など配慮を要す利用者も増えているため、連携・協力して効果的な支援となるよう取り組んだ。 ④【他の機能・機関と連携した支援】 ・専門的な支援を必要とする養育者を把握した場合には、課題を整理し、役割分担しながら対応にあたり、養育者にとって迅速で切れ目のない支援につなげるよう努めた。
拠点事業としての成果と課題
(成果) ・広報よこはまをはじめとする、幅広いターゲット層へ向けたPRから、支援を必要としている養育者や、こんにちは赤ちゃん訪問等様々なタイミングで制度の周知を継続的に行った結果、会員の増加につながった。 ・利用料の改定、「子サポdeあずかりおためし券」配布の効果もあり、養育者がより利用しやすい仕組みとなったため、依頼件数が急増。コーディネートでは、依頼内容や状況を丁寧に聞き取り、提供会員につなげていくことで、双方にとって円滑な援助活動を行うことができた。 ・専門的な支援が必要とされるケースも多くある中、会員の悩みやニーズを受け止め、区の担当者や子育てパートナーとも適宜情報共有して役割に応じた支援に結びつけることができた。 (課題) ・利用会員が増加する一方で、提供・両方会員数との乖離がある。さらに依頼件数が増加すると予想される中で、提供・両方会員の拡充は喫緊の課題である。 ・利用会員の中には民間のサービスと同じように捉える方が一定数いて、提供会員との意識の差が生じている。「地域の支え合い活動」という事業の本質を、正しく周知する取り組みが必要である。 ・多様化する利用会員のニーズに対し、丁寧な聞き取りと、提供会員への丁寧なフォローの取り組みが必要である。
振り返りの視点 ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。 イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。 ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。 エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。 オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。 カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。 キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。 ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。 ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど) コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。 サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A～D)					
		法人	区				
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・個別支援を通して把握した課題について、関係機関との連携を取る際に丁寧に伝えて共有したり、解決策を提案するなどしたが、具体的な支援につなげることができなかったこともあった。 子育て家庭が抱える不安や求める支援について関係機関に発信し、拠点の他事業とのつながりを生かして、不足する資源の発掘に取り組んでいく。 ・南区子育てもっとネット関連団体と顔の見える関係はできているが、まだ、つながりが薄い幼稚園や地域ケアプラザとも連携がとれるようにする。	B	B				
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A				
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	A				
評価の理由(法人)							
(主なデータ)							
【相談実績】							
相談件数	新規	継続	面接	電話	出張	オンライン	合計
R4年度	177	278	322	52	80	1	455
R5年度	197	277	330	54	88	2	474
R6年度	220	281	350	47	102	2	501
R7年度	223	291	357	34	101	0	514
【出張相談の実績】							
	地域子育てサロン	おでかけ広場	つどいの広場等	合計			
R5年度	12	10	13	35			
R6年度	12	10	14	36			
R7年度	21	10	16	47			
【主な広報周知・地域連携先】							
子育て支援者定例会							
主任児童委員連絡会							
こんにちは赤ちゃん訪問員連絡会							
南区子育てもっとネット会議							
子育てサークル「ちっちゃいカンガルー」							
子育てサークル「星の子探検隊」							
南区赤ちゃん学級							
【連携して実施した事業】							
子どもの発達と療育							
療育センターの相談員さんが来所します							
ダウン症児そだての会							
プレママ会							
シングルママの会							
外国人ママ・パパのための・・・							

【連携した主な機関】

プログラムでの連携	横浜市中部地域療育センター
	障がい児者の将来を考える会 泉の会
	みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ
	ひとり親サポートよこはま
個別相談での連携	医療的ケア児コーディネーター
	訪問看護ステーション
	児童発達支援事業所 / 放課後等デイサービス
	保育園 / 幼稚園 / 他区子育てパートナー
	子どもの居場所つばめ / トレジャーきっず
その他	南区社会福祉協議会(移動情報センター)
	フードバンク浜っ子南

1【妊娠期からの切れ目のない支援】

- ・「プレママ会」に加え、「沐浴個別レッスン」を開催することで、参加希望者の取りこぼしをなくすことができ、その中で個々のニーズに合った情報提供をきめ細かく行った。
- ・区役所の「ハローベビークラス」に出向き、拠点のPRを実施。そこから拠点のプレママ会や産後の来所につながる方も多くあった。
- ・子育てパートナーの存在が一目でわかり、話しかけやすいよう、拠点スタッフと異なる図柄のエプロンを着用し、記憶に留まって継続相談につながるよう声かけした。
- ・子育てサポートシステムのコーディネーターと必要に応じて情報共有し、連携して支援を行った。
- ・かつて拠点利用者だった学齢児、及び現在拠点利用中の学齢期のきょうだいの相談には、相談者の心情に寄り添って傾聴し、情報提供に努めた。

2【多様な子育て家庭に対するアプローチ】

- ・ひとり親家庭、外国にルーツを持つ家庭に対し、他機関と連携し、プログラムを開催。拠点利用のきっかけを作った。
- ・拠点内のプログラム参加から個別相談につながり継続的な見守りに発展したり、個別相談からプログラム参加につながることで、拠点利用の機会が増え、重層的な支援をすることができた。

3【地域資源との顔の見える関係、新たなつながり作り】

- ・子育てパートナーの交代をきっかけに、区内21か所の子育てサロンを訪問。担い手の方と交流し、地域情報を得る機会となった。拠点から地理的に遠い地域のサロンで複数回顔を合わせたことから個別相談につながった利用者もいた。
- ・子育て支援者定例会に参加し、支援会場「ホッとタイム」を訪問することで、子育て支援者と顔の見える関係づくりができた。また「南区子育てもっとネット会議」「みなともネットワーク」を通じて、多様な機関とのつながりづくりに取り組んだ。
- ・保育園・幼稚園・児童発達支援を見学し、その中で得た内容をスタッフと共に拠点での支援に生かした。
- ・「横浜市中部地域療育センター相談ルームいろは大通り公園」の相談員とほぼ毎月顔を合わせる機会ができたことにより、利用者に療育センターや療育についての的確な情報を提供することができた。

4【宣伝媒体を利用し、広く横浜子育てパートナーを周知】

- ・子育てパートナーチラシを作成し、区内全保育園・幼稚園の保護者向けに配布を依頼した。R8年度には内容を刷新し、相談内容がイメージできるよう具体的に例示した。
- ・拠点Instagramに『子育てパートナーの出張訪問日記』として、子育てサロンの紹介をしつつ、子育てパートナーの周知に役立てた。

評価の理由(区)
①【妊娠期及び子育て家庭・支援関係者に向けての周知活動】 令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)結果より、養育者の子育てパートナー認知度は38.2%と5年前の同様のアンケートと比較するとやや上昇しているものの、約4割に留まっている。はぐはぐの樹利用者から、スタッフは相談先として認知されているため、子育てパートナーを含めたスタッフへの相談機能は認知されてきていると考える。こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、ハローベビークラスなどの事業を通して、また地域サロン全数訪問等でチラシ媒体の配布含め利用者支援事業について区民に広く周知していることを確認。さらなる周知場所等についても検討を継続している。 ②【相談者の主体的な選択を尊重する傾聴姿勢】 ・区拠点定例会では、養育者からの相談内容を共有し継続支援が必要な相談について、望ましい対応を検討し、役割分担しながら支援できている。急いで対応が必要な場合は地区担当保健師が子育てパートナーより直接報告を受けスムーズに連携を取ることができている。 ③【関係機関との協働の関係づくり】 ・子育てパートナーが関係機関の定例会に出向き、顔が見える関係づくりができるよう調整を行った。 ・子育て包括支援センターの年間振り返りとして年度末に母子保健コーディネーター、保育・教育コンシェルジュで情報共有を行う機会をつくり、現状と課題の共有ができた。

拠点事業としての成果と課題
(成果) ・拠点スタッフと子育てパートナーの連携について再確認したことで、速やかに新規相談対象につながる事ができた。継続的に見守る親子については入退館システムの申し送り欄を活用し、確実につながるシステムを構築。子育て家庭に伴走し、その時々に必要な情報提供を行った。 ・子育て支援者、こんにちは赤ちゃん訪問員、主任児童委員の定例会や、拠点のネットワークを通じて、顔を合わせる機会が増えたことにより、出張相談の際、受け入れがスムーズになり、相談者となつながりやすくなった。 (課題) ・産後、安心感を持って子育てができるよう妊娠期からの支援をより強化するため、区の母子保健コーディネーターと情報共有し、拠点を活用する仕組みづくりについて、さらに強化していくことが課題。 ・南区で増加している外国にルーツのある家庭について、今後も区役所、関係機関と連携し、積極的に拠点につながるよう工夫する。 ・発達相談や療育についての個々のニーズに応えるため、児童発達支援、放課後等デイサービス、学齢期の支援場所との関係強化を図っていく、また今後更なる増加が見込まれる医療的ケア児の相談対応のためには、医療的ケア児者等コーディネーター、訪問看護ステーションとの関係づくりに注力することが必要。

振り返りの視点

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。

イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。

エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。

オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。

カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。

キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。

ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。

ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。

コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。

サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。

協働事業プロセス相互検証シート

1 事業計画段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・南区の子育て家庭の特性を共有しそれに対応していくために必要な知識を定例会や研修を通じて共有できている。特に子育て世代包括支援センターの両輪としての役割分担と連携の在り方については具体的に話し合うことができた。

【今後改善が必要と思われること】

目指す拠点の姿に近づくためにそれぞれが何をできるかを考え、役割分担等を話し合う機会をタイムリーに持つことが必要。

2 事業実施段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

母子保健コーディネーター、保育・教育コンシェルジュ、横浜子育てパートナー間で、お互いの役割を理解し共有しながら、妊娠期からの切れ目ない支援として「プレママ会」「幼稚園保育園説明会」を実施できた。個別の相談に関しても、区と拠点の役割等について情報共有し、安心して相談の継続ができた。

【今後改善が必要と思われること】

・地域の子育て情報が拠点に情報収集され、地域への情報発信、届いてない層への発信の充実。

3 事業の振り返り段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・ひとつひとつの事業について定例会で報告して意見交換ができた。

【今後改善が必要と思われること】

・事業の長期的な見通しや目指す姿の設定などを通じて職員全員の考えを話し合い、共有する時間を持つとよい。
・子育て支援にかかわる関係者の拠点への期待、求める役割について、年度ごとに意見を聴取できる機会を持ち、振り返りや目標設定に反映させられるとよい。